西村　玲
（にしむら　りょう）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 168 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 文化科学専攻
学位論文題目	**日本近世仏教思想の研究―学僧普寂をめぐる諸問題**
論文審査委員	（主査） 教授　佐藤弘夫　教授　吉田　忠 教授　中嶋隆藏 教授　大藤　修

論文内容の要旨

本論文は、日本近世仏教の思想について、護法論を含む教理思想と実践行にわたって、近世中期の時代状況の中で考察するものである。本論において焦点となる学僧・普寂（一七〇七～一七八一）は、伝統的仏教の側に立つ優れて時代的な思想家であり、近世仏教思想の意義を考察するにふさわしい人物である。

日本仏教は近世において、世俗権力である幕府の支配下に入ることによって、支配層から民衆の生活にまで広く行き渡り、普遍化した。日本仏教の特質はその世俗化にあるが、近世はそれがもっとも進展した時代であり、名実ともに国民宗教となった時代である。しかし従来の思想史研究においては、政治史的視点のみから、近世仏教思想は封建教学であるからそこに主体的な思想はないとされて、ほとんど研究対象とされてこなかった。また、仏教学からの諸研究においては、近世仏教思想は近代仏教学に比肩する高度な学問であることが指摘されるのみで、歴史的意味が与えられないままに閉塞して、推移してきた。

古代・中世の仏教研究と比較しても、近世は歴史学と仏教学の断絶がことさらに深い分野である。思想史の遅れは、近年の政治史・社会史の進展に比較して目に余るものがあり、近世仏教の思想的意義の確立が、早急に求められている。本論文は、史学と教理の断絶を埋める方途によって、近世仏教思想の意義を具体的に考察するものである。

本論の構成を述べると以下の通りである。

序章では、先行する近世仏教研究史と普寂研究を概括し、本論の課題を提示する。

第一章では、普寂の伝記から、その生涯と具体的な実践行を示し、年譜を付す。

第二章では、普寂の思想を中心に論じる。

第一節は、戦後に中村元によって再発見された富永仲基の思想の意義を、これまで省みられなかった仏教思想の視点から明らかにして、近世中期の仏教をめぐる思想状況を考察する。

第二節は、排仏論の主題の一つ、須弥山説論争を対象として、懐徳堂からの須弥山批判とそれに対する普寂の答えを示した。従来研究では、仏教側の須弥山説論は、近代の科学思想を全く理解しないものとされてきたが、本論は、仏教側が最初期の段階において核心的に応えたことを明らかにする。

第三節は大乗非仏説について、普寂の法相批判を検討し、普寂が華厳の法相批判にのっとって、科学的合理性に応えていることを示した。近世においては、伝統的な教理思想は時代から乖離して思想的桎梏となっていた、という通説に対して、普寂が伝統的思想に即することによって初めて、時代的課題に応え得たことを明らかにする。

第三章では、近世仏教における実践行について論じる。

第一節は、近世戒律復興運動において実行された絹衣禁止を通して、近世社会における律僧の意味と、禁絹の思想について述べた。これまでの日本仏教史において、律僧の絹衣禁止が問題となったことはなく、本節は律僧の具体的な一面を新しく示すものである。

第二節は、絹衣禁止がもたらした律僧の堕落を示して、それに対する禁絹批判を論じ、近世における絹衣論の展開を追う。普寂の禁絹批判はその中でも極北に位置している。近世中期の仏教思想の成熟度を示して、近世に小乗戒が実修された理由を明らかにした。

第三節は、普寂の大乗戒を対象として、普寂の修道論を明らかにした。その修道論は優れて合理的かつ宗教的なものであり、近世仏者独自の宗教性を示す。従来、近世仏者は堕落した僧侶とされ、その宗教性について正面から論じられたことはなかった。本節は、学僧の修道論から、近世仏者の宗教性を明らかにするものである。

以下、本論文の構成に従って、内容の要約を示す。

序章　近世仏教思想史の課題

戦後の近世仏教史研究は、辻善之助の近世仏教堕落史観から始まる。辻により近世仏教は、政治史的にも思想史的にも、封建制の下で形骸化し堕落した体制内宗教と規定された。辻史観の打破が研究の出発点となった。以下、現在までの近世仏教史研究について、政治・社会史および思想史の順に考察し、本論の対象である普寂についての個別研究をまとめて、本論の意義と視点を述べた。

現在までの政治・社会史の成果から、仏教は近世において、幕府権力による本末制度・檀家制度などの進展によって、広く一般の生活に行き渡り、国民宗教として普遍化したことが明らかになった。近世における僧侶・教団の堕落化と、仏教教義が民衆生活に根付いた過程はその表裏であり、辻史観は近世仏教のコインの裏側だけを捉えたものであった。コインの表裏を越えた近世仏教独自の意義が明らかになるのは、近世仏者が自身のために書いた史料、その中核に踏み入ることによって初めて可能だ、とする本論の視点を示した上で、思想史の先行研究についてまとめる。

戦後の思想史的研究は、中村元によって突破口が開かれた。中村は、近世仏教の世俗化は宗教の普遍化、社会への思想還元を意味すると評価し、思想的に価値あるものとして見る肯定的視点を創出した。しかし中村は、啓蒙主義の立場から、近世仏教の大半を占める伝統的な教理思想を前近代の封建思想として、無前提にレッテルを貼ることで切り捨てた。近代性の尺度のみでは、近世の思惟の豊かさを捉えることはできない。続く柏原裕泉は、更にすべての教理思想を無前提に除外し、表層の護法論のみから、

近世仏教全体に主体性は無かったと断じた。柏原が、仏教学からの研究成果を全く無視して論じたことは、近世仏教思想の研究において致命的な欠陥となった、と言わざるを得ない。近世仏教思想をただ護法論のみとする、柏原のドグマの打破が求められる。

次に、普寂（一七〇七～一七八一）に関する個別研究をまとめた。普寂は、明治期に村上専精によって発見された。村上は、伝統宗学から異端として切り捨てられていた普寂を、歴史と教理を統合止揚した学僧であり、近代仏教の進むべき方向を示唆した思想家として発見し、思想史的に意義づけた。また、伝統宗学からの諸研究は、普寂が異端であるのはその実践行重視にあることを、明らかにした。

戦後の普寂研究は、戦前のそれをほぼ踏襲している。伝統宗学からの諸研究によって、普寂の諸宗の祖師批判が明らかにされ、普寂は如来蔵に基づいていることが示された。思想史上の視点からは、田中久夫によって近世中期の復古主義が指摘され、思想家としての普寂像が示唆された。

これらの、主に仏教学からの研究の問題点は、時代状況の中での普寂の意味がまったく不問に付されていることである。普寂に限らず近世教理の研究は、いまだ歴史学をはじめとする他分野との連携がなされておらず、教理研究は閉塞したままになっている。

近世仏教の思想的意義が明らかにされていないために、政治・社会史においては時代と社会的状況に応じて、仏教の意義は「堕落」と「民衆化」という相反する価値が与えられ、現在に至ってなお同様である。本論は、以上の問題意識に立って、仏教学からの研究成果を前提として、護法論を含む教理思想と実践行にわたって、近世仏教が思想として内包せざるを得なかった問題を、時代状況の中で考察するものである。

第一章　普寂の生涯

本章では、これまでまとめられていなかった普寂の七十五年にわたる生涯を、自伝と弟子の伝記から明らかにした。その生涯を、第一期（誕生～二十八歳）修学期、第二期（二十八歳～五十七歳）遍歴修行期、第三期（五十七歳～七十五歳・死）住院著作期として、三期に分けて叙述し、最後に年譜を付した。

第二章　近世仏教の思想――普寂の思想をめぐって

本章では、まず富永仲基の思想から、近世中期の仏教教義をめぐる思想的状況――須弥山説批判・大乗非仏説――を明らかにした上で、それらに対する普寂の答えを示した。

第一節　富永仲基の思想

本節では、近世仏教にとって富永仲基の衝撃とは何であったか、を仲基の著書『出定後語』から明らかにした。戦前に内藤湖南によって発見された富永仲基は、戦後中村元によって、「合理性・近代性」を持つ「近代の先駆け」「人間理性の発見者」として高く評価されたが、その具体的内容は判然としないままであった。その合理性とは、仲基を仏教の価値観から見たときに、初めて明確になってくる性質のものである。

仲基は、仏教の神秘的な説はすべて仏の幻であり、インドにおける庶民教化のための方法であったという。その幻とは、修行者が禅定中に見る幻影であり、禅定によって身につけた魔力のことである。仏の幻は、人の夜の夢と同じく、人を惑わす幻影の戯れであり、現実においては限りなく希薄な存在に過ぎない。仏の真意は幻を越えて、世俗倫理としての善を勧める事のみにある、という。仲基の著書『出定後語』は、釈迦以来の禅定・誤謬である夢幻から覚めたという宣言であり、聖なる釈迦と対等な、純粋に世俗的な人間としての自覚を示すものである。宗教的虚妄を抜け出した人間理性は、世俗倫理となって現われる。それが仲基の目覚め、「出定」である。

仏教経典に出てくる幻は、仲基とは逆に人の生死の儚さの比喩としてであり、世俗事象の存在の希薄さの譬えとして用いられる。仏教的価値観では、人が目覚めるべきは現実の事象の虚構性からであり、仏の悟り、仲基の言う仏の幻こそが、存在度のより高い真実とされてきた。仲基の出定は、仏教における聖俗の存在論を反転させ、聖なる仏の幻と俗なる人の夢は、その存りようを逆転した。

近世中期以後の仏者たちは、仏の悟りへの伝統的な目覚めと、仲基の出定を統合止揚すべく、全力を挙げることになる。仲基と同時代を生きた普寂は、仲基と同じく仏教の世界像を瞑想中の幻影として捉え、仲基の大乗非仏説と同じく仏教を歴史的発展過程の中で捉えている。しかし普寂は、仲基を「外道」と鋭く批判している。古代からの伝統的教理思想は、人間理性の目覚めというこの近代の予兆をいかに迎え、どのように対応したのか。日本思想史上において、近代化とは何だったのか。以下、普寂の思想に入る。

第二節　普寂の思想Ⅰ・須弥山論

十八世紀は西欧文化の受容がはじまった時期であり、アリストテレスの天文学の立場から、仏教の世界像である須弥山説に対して批判が始まっていた。普寂は、最初期の須弥山説論争に加わった一人である。本節では、普寂の護法論の論理から、彼が西欧科学の正確さを認め、それをいかに世間世俗知と規定して、向かい合ったかを明らかにする。

まず懐徳堂の儒者・五井蘭洲と、浄土宗僧侶・文雄の論から、一般的な須弥山説論争が目に見える現実・事象というレベルで争われていることを確認した。

これに対して普寂の護法論は、仏教の世界観を世俗と勝義（真理）の形而上学的体系として構築するものである。普寂は、華厳経の海印三昧を下敷きとして、須弥山世界は聖者の瞑想中の幻影であるとした。さらに、西欧科学は瑜伽論の四真実の体系の中で、第二真実である世俗学にあたる、としてその有用さを認めた。その上で、法相唯識の四重二諦の論理によって、西欧科学を世間世俗知と定義して、仏教的価値観の下辺に位置づけた。

従来の護法論研究では、すべての近世仏者は近代科学の論理をまったく理解できずに、陳腐な須弥山説護法論を展開したのであり、そこに思想として見るべきものはないとされてきた。が、しかしそれは教理に基づく仏教側の論理を理解できなかったからである。この通説に対して、論争の最初期において普寂は、科学からの仏教批判を深層において理解し、華厳と法相の教理思想に基づいて応え得ていることを示した。

第三節　普寂の思想Ⅱ・大乗非仏説論批判

十八世紀の仏教思想にとって、大乗非仏説は大きな問題であった。この時期の仏教思想に対する通説は、須弥山説批判と同じく、大乗非仏説にも対応できず、閉鎖的な宗学に閉じこもった、とされている。しかし、既に明治期の村上専精によって、富永仲基が非仏説を唱える以前から、仏教内部では学僧たちによって、大乗仏説への疑義が持たれていたことが明らかにされている。

普寂もまた、大乗仏説への疑問を抱いた一人である。普寂は、座禅をはじめとする実践行と華厳学によって、この疑問を解決していった。本節では、法相の根本論典『成唯識論』中の大乗仏説に対する普寂の注釈から、彼の護法論と教理思想に一貫する論理を明らかにした。

まず普寂は、史学的な論証によって、法相が多用する論理学の因明は、インドの風習にすぎないとする。その上で、法相が大乗仏説を論理によって証明したことを、批判する。普寂によれば、大乗仏教は言葉と論理を超えた瞑想中の真理であるから、論理によっては知られないものである。大乗仏説に対す

る論理と実証の限界を知って、大乗の真理を実践行によって知らなくてはならない、という。

さらに普寂は、法相は空を理解しないと批判して、法相が論理性に頼るあまり如来蔵の真理を知ることができない、とする。この批判は、華厳宗祖師・法蔵の法相批判にのっとったものであり、普寂の論理の基盤となっている。

普寂は自らの瞑想体験に基づいて、須弥山説や大乗仏教の神秘的な教えは、聖者の瞑想中の真理であるとする。その認識に基づいて、排仏論に見られるいわゆる近代的合理性は、論理性のみを唯一絶対の基準とする世間世俗学であり、宗教にとっては無価値である、と位置づける。

普寂の思想基盤が、釈迦在世時の僧侶の生活の実現を目指した実践行と伝統的な教理思想であることが、こうした本質的な答えを提出させたのであろう。近世において伝統的な教理思想は、時代状況から乖離し凝固して、個人の思想的桎梏となっていた、という従来の通説は誤っている。そうではなく、古代から伝統と記憶に留められてきた精神の形式に即することによってのみ、普寂は時代の課題に答えられた。その答えは、日本仏教の近代化の過程において、今に至るまで精神的指標となり得ている。

本節で、仏教思想における実践行の重要性を示して、近世仏教の実践行に入る。

第三章　近世仏教の実践行——戒律復興運動と普寂

本章では、近世戒律復興運動を対象とした。具体的には、従来の日本仏教史では言及されたことのない絹衣禁止の戒律について考察し、近世戒律における普寂の位置づけを行う。その上で、普寂の修道論を明らかにする。

第一節　近世律僧の絹衣禁止について

これまでの研究では、近世仏教における戒律復興運動は、既成仏教の堕落に反発して行われたという類型的な規定のみで、その運動を担った律僧の社会的意義については、ほとんど考察されてこなかった。本節は、近世律僧が実践した絹衣禁止の社会的意義と、蚕の不殺生を掲げる禁絹の思想から考察した。

近世幕藩体制下の僧侶の衣は、幕府権力によって定められるものであり、衣は本末体制の中での階級化に重大な役割を果たしていた。そうした中での律僧らの黒衣禁絹は、紫衣・金襴袈裟に象徴される寺院階級社会に対する名聞出世の拒否、および遁世を目指す、彼らの志の表現であった。それは幕府にとって好ましい僧侶の在りようでもあったから、律僧の黒衣禁絹は律宗制度として社会的に公認され、一定の地位を得ていた。

仏教の内部にあっては、絹は蚕を殺して得るものだから法衣としてそれを着ることは許されない、という唐代・道宣の主張によって、絹衣を着ないことは蚕の声が聞こえる仏国土への希求を示し、大乗仏教の慈悲の象徴ともなった。大乗の誡めである禁絹を守る僧侶は、四分律という声聞行、いわゆる小乗戒を守りつつ、大乗菩薩の誇りを持っていた。

かくして黒衣禁絹は、聖俗二界を貫き、外面的にも内面的にも律僧たちを強固に支える表象となった。それは、身につける衣服がその人を規定する近世社会において、ほとんど完璧なまでに、完成されたシンボルとなったといえるだろう。

第二節　絹衣論の展開——禁絹批判を中心に

本節では、近世を通した絹衣論の展開を追い、近世戒律の生きた側面を示す。

禁絹は、近世初頭に真言律・天台安楽律において開始された。最初期には道宣流の法衣のみの禁絹であったが、律僧内部で貪欲さへの抗議として、一切資具への禁絹に拡大していった。中期に禁絹は、形式化した爛熟期を迎えて、禁絹批判が生まれる。教系における禁絹批判は、その根拠とされた首楞厳経

に対する解釈が中心となる。まず鳳潭等が提出したのは、禁絹は楞厳経に書かれた東方だけの誡めであるというものである。次に普寂等が示したのは、一切の不殺生を説く禁絹を初めとする大乗戒は、優れた菩薩のみに可能な行為であり、凡夫には不可能であるというものである。

普寂は、凡夫の僧侶は実行可能な声聞戒をまず行うべきであるとした。これが、改革派の律僧らが小乗戒を選択した理由である。後期には、道元の袈裟論に基づいた曹洞禅からの禁絹批判が確立し、教系・禅系からのそれぞれが示された。近代明治期に入っても、少なくとも真言律の一部では批判を知りつつ、禁絹が遵守されていた。

世俗に生きる官僧の権威と力の象徴である、紫衣・金襴袈裟に訣別した律僧にとって、禁絹は戒律遵守の精神を内外に向かって、目に見える形で掲げる象徴となった。しかしそのあまりに明白な正当性の故に、禁絹それ自体が自己目的化し、形骸化と頽廃を招いた。普寂はそれを、「内染外浄、誑仏の徒」（外面は清浄な形をとって内面は堕落し、仏を誑かす徒）と、厳しく批判した。近世戒律の内実は刻々と変化していたといえるだろう。

衣一枚にその存在がかかった近世社会にあって、一方で世俗権力と結ぶ紫衣への欲望を拒否し、一方で聖性を社会的に保証する禁絹への誘惑を拒否して、律僧たちは非布非絹をバネに、閉塞する現実から跳躍しようとした。彼らの精神と学問は、今日の我々が想像する以上に自由で強靭なものであったのではないか。

普寂は、教系における禁絹批判の最右翼に位置しており、精神的な大乗戒よりも現実的・具体的な小乗戒を先行すべきであると主張した。以下、普寂の修道論の解明に入る。

第三節　普寂の修道論

本節では、普寂の大乗戒観を中心とし、併せて浄土宗であった彼の念仏行から、その修道論の全体を考察する。

普寂によれば、大乗は禅定の中で優れた者にのみ秘密に伝えられた教えであり、もともと凡人・愚人のためのものではない。精神性を重視する大乗教は、凡夫にとってはこの世ならぬ彼岸、極楽においてのみ実行可能なものである。それに対して、小乗戒はこの世でこの身体を以て行いうる第一の実践行であり、釈尊当時の正しい修行を復活させるものである、という。

普寂の修道論は、この世では現実的な声聞行を行うべきである、というものである。普寂にとっては、大乗の教えは仏菩薩のみに実践できるものであるから、精神性のみが存在する極楽にこそふさわしい。普寂が望み信じ得た極楽は、精神は肉体と分離して世界に遍在している、というものであった。彼の修道は、すべての仏教と一致する念仏行を架け橋として、この世での声聞行からあの世での大乗教へ、現実の肉体から純粋な精神へと、生を越えて深めていくものである。

中世の法然・親鸞は、聖道を行い得ない自らに絶望して、浄土を願い念仏行を行った。彼らは、いってみれば、自分一個の内面性について認識するだけで、いまだ足りた。しかし近世の普寂は、この世界にも絶望せざるを得ない。近世を生きる彼は、この世の現実の中に純粋な精神性や神的なものは、もはや存在しないことを認識せざるをえず、あの世の極楽という場所においてしか、信じられない。

現実には小乗行の実践のみが可能な道であり、大乗仏教の精神性は彼岸に属するものとするその定義に、近世仏者の絶望と孤独、そして希求の深さを見る。

論文審査結果の要旨

本論文は、本論文の課題と方法について述べた序章、普寂の生涯を描いた第1章、普寂の思想の解明を試みた第2章、および戒律を中心とする普寂の実践行に焦点をあわせた第3章からなる。

序章「近世仏教思想史の課題」では、先行する近世仏教研究史と普寂研究を概括し、本論の方法と課題を提示する。近世仏教は辻善之助によって、幕藩体制下で形骸化し、政治的にも思想的にも堕落した体制内宗教と規定されたため、その辻史観の打破が戦後の近世仏教研究の出発点となったことをまず指摘する。次いで、現在に至る近世仏教研究について、政治・社会史および思想史の順に整理し、また普寂についての個別研究の紹介を行い、従来の研究史の問題点を指摘した上で、本論文の意義と視点を述べる。

第一章「普寂の生涯」では、普寂の75年にわたる生涯を、第1期（～28歳）修学期、第2期（28歳～57歳）遍歴修行期、第3期（57歳～75歳）住院著作期の3期に分けて叙述し、最後に年譜を付す。普寂の生涯を具体的な史料に即して明らかにするとともに、その思想内容や行状から時期区分を試みた意義は大きい。年譜の作成も、今後の近世仏教研究の進展に貢献する業績である。

第二章「近世仏教の思想――普寂の思想をめぐって」では、普寂を中心とする近世仏教について、護法論をはじめとするその思想を論じる。

第1節では、戦後に中村元によって再発見された富永仲基の思想の意義を、これまで省みられなかった仏教思想の視点から明らかにして、近世中期の仏教界を取り巻く思想状況の一端を明らかにしようとする。大乗非仏説をはじめとする富永仲基の主張は、同時代の仏教者に多大な衝撃を与えた。仏教者たちにとって、伝統的な悟り世界の追求と、仲基のいわゆる「出定」を統合・止揚することが、避けては通れない課題となったことが論じられる。

第2節は、排仏論の主題の一つである須弥山説論争を対象として、懐徳堂側からなされた須弥山説批判とそれに対する普寂の答えを示す。従来の研究では、近世仏教者は西欧の科学思想を全く理解しないまま、頑迷に旧来の須弥山説に固執し続けたとされてきた。それに対し本論文の提出者は、仏教側が最初期の段階においてその意味をきちんと理解し、独自の対応をなしたことを論じる。

第3節は、大乗非仏説について、普寂の法相批判の論理を検討し、普寂が伝統的な華厳の法相批判にのっとって、科学的合理主義に独自の立場から応えていることを示そうとする。近世においては、伝統的な教理思想は時代から乖離して思想的桎梏となっていたという通説に対して、普寂は伝統的思想に即することによって、初めて時代的課題に応えることができたとする。

第三章「近世仏教の実践行――戒律復興運動と普寂」では、普寂を中心に、近世仏教における実践のあり方とそれをめぐる理念について論じる。

第1節は、近世戒律復興運動において実行された絹衣禁止を通して、近世社会における律僧の意味と、禁絹の思想について述べる。これまでの日本仏教史研究において、律僧の絹衣禁止がテーマとして取り上げられたことはなく、広く関係資料を博捜してこの問題を正面から追求した本節は、研究史上きわめて重要な意義を有するものである。

第2節は、絹衣禁止がもたらした律僧の堕落の実態を示すとともに、それに対して巻き起こった禁絹批判をとりあげ、その流れの中に普寂の禁絹批判を位置づけようとする。世俗に生きる官僧の権威と力の象徴である紫衣・金襴袈裟に訣別した律僧にとって、禁絹は戒律遵守の精神を内外に向かって、目に見える形で掲げる象徴となった。しかし、やがては禁絹それ自体が自己目的化し、形骸化と頽廃を招い

た。普寂はそれを、「内染外浄、誑仏の徒」（外面は清浄な形をとって内面は堕落し、仏を誑かす徒）と、厳しく批判した。近世においても、仏教界が自己のあり方に対する真摯な反省の姿勢を失っていなかったことを指摘する。

第3節では、普寂の大乗戒論を素材として、その修道論を明らかにしようとする。従来、近世仏教者の堕落ぶりが一方的に強調され、その宗教性や精神性について正面から論じられることはほとんどなかった。それに対し、普寂の修道論は優れて合理的かつ宗教的なものであり、近世仏者独自の精神のあり方を示すものであるとする。普寂によれば、大乗は優れた資質をもった者にのみ秘密に伝えられた教えであり、もともと凡人・愚人のためのものではない。それに対して、小乗戒はこの世でこの身体をもって行いうる第一の実践行であり、釈尊当時の正しい修行を復活させるものである、と論ずる。

本論文は、これまでほとんど注目されることのなかった普寂の事跡と著作に光を当て、丹念な史料の読みにもとづいてその思想内容を明らかにした上、それを同時代の歴史的文脈のうちに位置づけることを試みたものである。その上で、普寂が伝統的な教理に依拠しながらも、それを独自に読み替えることによって、すぐれて主体的に時代的課題に応えようとしたと結論づける。論旨にやや粗さが残るものの、普寂という思想家を発掘し、広い視野からその独自の意義の解明に取り組んだ功績は大きい。本論文が斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑いない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。